

原瀧山岩陰遺跡



1979

岡山県川上町教育委員会



原淹山岩陰遺跡

は　し　が　き

1977年1月30日、兼高昭一と西森裕良は、暇後間もなく偶然の機会に出土した縄文土器・注口形完形品の出土地を探るため、川上町大字地頭字堂の谷字原龜山中腹の石灰岩露岩地を訪れた。縄文土器を出土した「岩陰状」の個所はすでに石灰岩採掘によって完全になくなっていたが、その上方にあたるところにおいくつかの岩陰が残存することを発見し、ここもまた遺跡である可能性が強いと判断された。連絡を受けた近藤義郎は田仲満雄・神谷正義を伴い兼高・西森の案内で現地を調査し、北東端の岩陰の地表近くにおいて2・3の土器片と火にあたり変色したものを含む若干の獸骨を採集し、そこが岩陰遺跡であることを確かめた。そのほか、右に接するように第2の岩陰、さらに北東に離れて一岩陰が注意されたが、付近一帯の露岩落石の状況と地形からすると採掘場として消滅した部分を含め、もとさらにいくつかの岩陰が存在したものと思われた。

先の完形縄文土器の出土地点は、本岩陰の下方數十mに当るが、兼高が発見者から伝聞した出土状況を合わせると、おそらくこれもまた岩陰の一つであった可能性が高い。

1977年を通じて発掘の可否を検討してきた兼高・西森・近藤は、幸いにも川上町教育委員会（教育長三村義弘氏）の積極的な好意を受けたため性格解明のための小規模な調査を試みることとし、土地所有者新井新寿・溝原太郎両氏の快諾を得て1977年9月20日発掘届を提出し、町教委の了承と援助を得て、1978年2月22日から28日にかけて発掘を実施した。なお発掘に要した資金は川上町教育委員会からの助成金に加えて朝日学術奨励金（代表松崎寿和）の一部をあてた。

ここに上記関係の機関及び諸氏に対し心から御礼申し上げる。

1979年7月29日

近　藤　義　郎
西　森　裕　良
兼　高　昭　一

目 次

はしがき	1
1. 遺跡の位置	4
2. 第Ⅰ岩陰	6
3. 第Ⅱ岩陰	11
4. 第Ⅲ岩陰	16
5. 動物遺体一覧	21
6. あとがき	25
付	26

本調査は以下の三班編成で行なわれたが、各班報告もその編成のまま討議・作成された。各班原稿の補正・編集は近藤義郎・小野昭がおこなった。また遺跡の位置は小野昭、動物遺体は林謙作、あとがき及び付は、近藤義郎の執筆に、写真は小野昭・近藤義郎による。

第Ⅰ(岩陰)班	第Ⅱ(岩陰)班	第Ⅲ(岩陰)班
○樋口伸子(4年)	○山本悦世(4年)	○用田政晴(4年)
深井鶴一(4年)	細木啓義(3年)	松田順子(3年)
秋山浩三(2年)	瀬川拓郎(2年)	宇垣匡雅(2年)
田代健二(2年)	長瀬治義(2年)	荒俣一雄(1年)
池上博(1年)	亀井豊美(1年)	山中悦雄(1年)
北岡真理(1年)	乗岡実(1年)	清水恵子(1年)
		石井義則

○は班長、学年は1978年2月当時の岡山大学法文学部在学年を示す。

なお地形測量は1979年1月20日、小野昭、秋山浩三、瀬川拓郎、宇垣匡雅、長瀬治義、乗岡実、荒俣一雄、山中悦雄、丹羽野裕によっておこなわれた。

図 表 目 次

図 1 原瀧山遺跡周辺地形図 (1/25万)	4
図 2 原瀧山遺跡全体図	折こみ
図 3 第Ⅰ岩陰発掘区	6
図 4 第Ⅰ岩陰 F 4 , F 5 グリッド南西壁断面	7
図 5 第Ⅰ岩陰 H 5 グリッド南西壁断面	7
図 6 第Ⅰ岩陰出土遺物	8
図 7 第Ⅱ岩陰発掘区	11
図 8 第Ⅱ岩陰 E 4 ~ E 6 グリッド北東壁断面	12
図 9 第Ⅱ岩陰 F 4 ~ F 6 グリッド北東壁断面	12
図 10 第Ⅱ岩陰出土遺物	14
図 11 第Ⅲ岩陰発掘区	16
図 12 第Ⅲ岩陰 D 5 , D 6 グリッド南西壁断面	17
図 13 第Ⅲ岩陰 E 4 , E 5 グリッド北東壁断面	17
図 14 第Ⅲ岩陰出土遺物	18
図 15 繩文注入土器	26

写 真 図 版 目 次

図版 1 遺跡遠景
2 第Ⅰ岩陰
3 第Ⅱ岩陰
4 第Ⅲ岩陰
5 遺物出土状況
6 出土遺物
7 出土遺物
8 出土遺物

原瀧山岩陰遺跡

1. 遺跡の位置

原瀧山遺跡は川上郡・川上町・地頭に所在する。地頭の街の四周は山地を形成し四方に連なつ

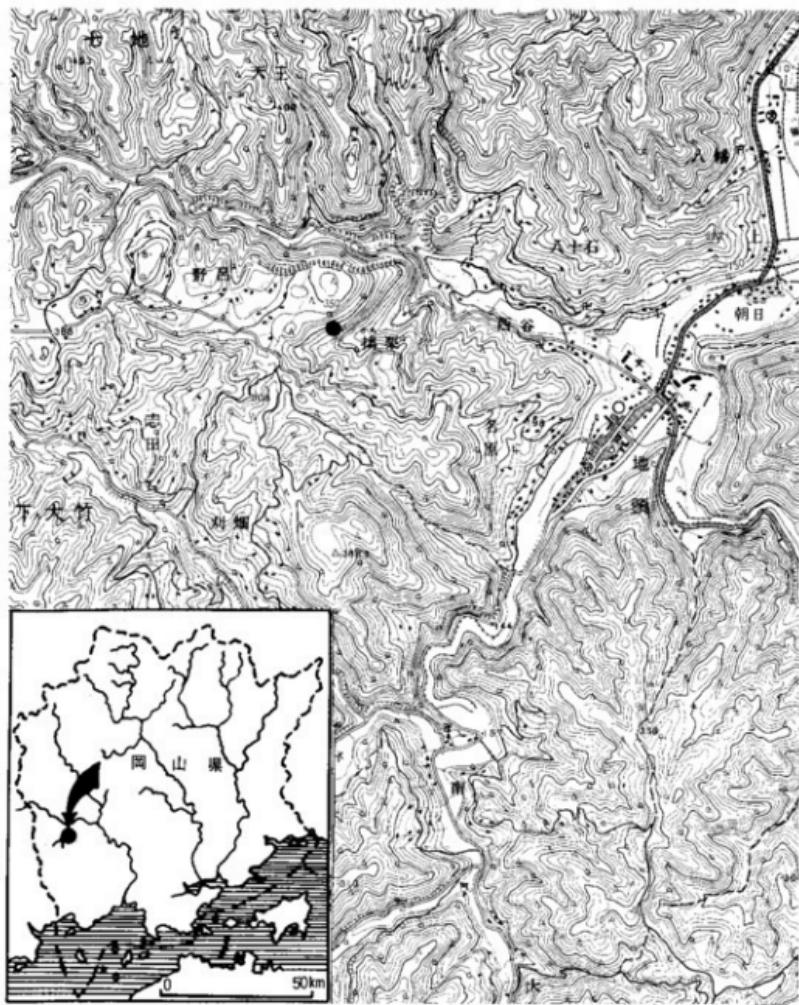


図1 原瀧山遺跡周辺地形図

(図幅: 1/2.5万 地頭)

●印が遺跡の位置

0 1km

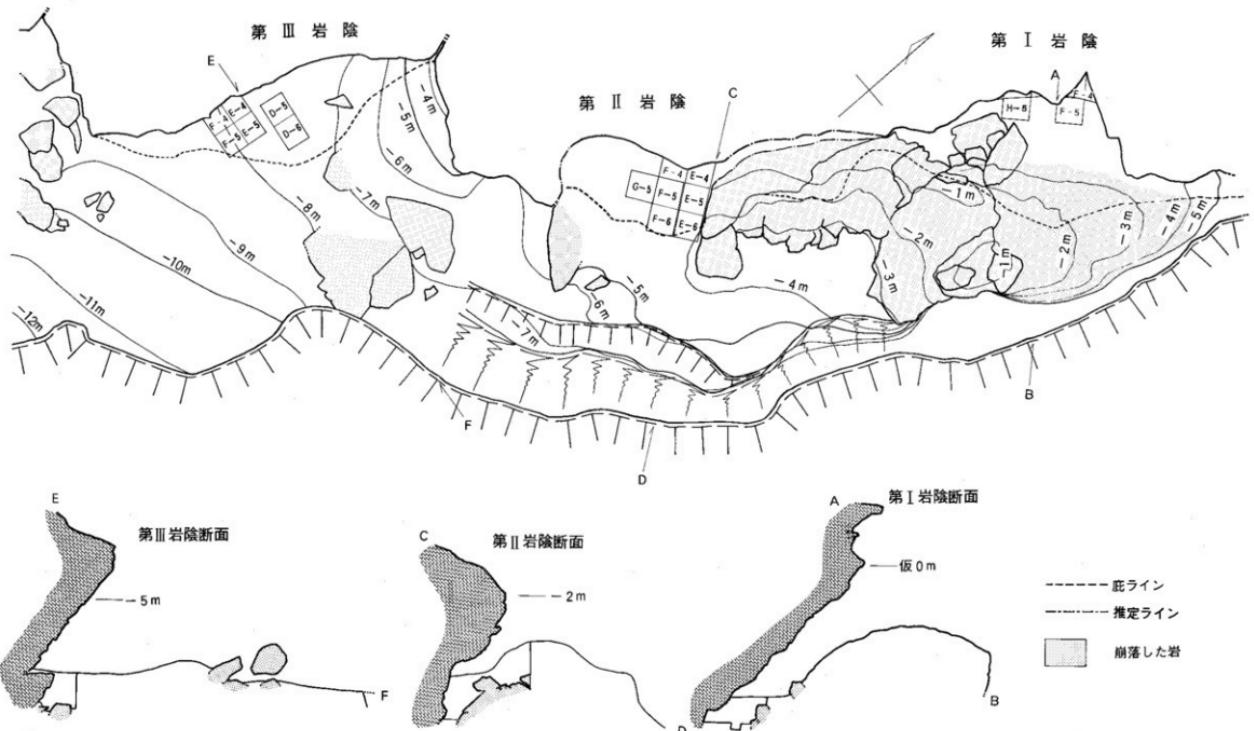


図 2 原瀬山遺跡全体図

0 10m

ている。この地頭の街から西方へ約1kmの地点に、幅約200mの小さな谷が北東の方向に開口している。

遺跡はこの谷の奥まった標高約300mの斜面にはば南東に面して所在する。遺跡からは谷の開口部である北東から南東の方向まで眺望がきく。

この付近一帯の岩質は石灰岩であり、原瀧山遺跡も、石灰岩の岩陰を利用して形成されたものである。遺跡からは、やや急な傾斜で谷底までスロープが続いているが、かつての石灰岩採掘によって、現在すでに部分的に旧地形は失なわれ、遺跡の道下まで岩盤が削られ、急峻な崖をなしている。

原瀧山遺跡は複数の岩陰遺跡からなり、東から順に第Ⅰ岩陰、第Ⅱ岩陰、第Ⅲ岩陰と命名した。

遺跡のひろがりは、第Ⅰ岩陰から第Ⅲ岩陰の端まで約40mを計り、等高線にはば沿って近接してならぶ。テラスはあまり良く発達していない。石灰岩の採掘によって、旧地形が部分的に失なわれているので、テラスの奥行きは正確に計測することはできないが、現状で約8~9mの範囲におさまる。

落盤は全般に著しいが、第Ⅰ岩陰と第Ⅱ岩陰の間が顕著である。第Ⅰと第Ⅱ岩陰の間の落盤は、幅約12m×7mの範囲でみとめられる。両岩陰は今回の調査によって、本来連なるものであることが判明したので、中心部は落盤によって覆われたことになる。

したがって落盤部分は調査できず不明の点が多いので、今回は、さしあたり第Ⅰ岩陰、第Ⅱ岩陰というように、二つの岩陰としてあつかうこととする。

第Ⅰ岩陰の庇の出は約4.5mを計る。第Ⅱ岩陰の庇の出は約3mである。

第Ⅲ岩陰は、第Ⅱ岩陰から約10mをへだてて西方に所在し、本来別の岩陰である。第Ⅲ岩陰の庇の出は最大3mを計る。

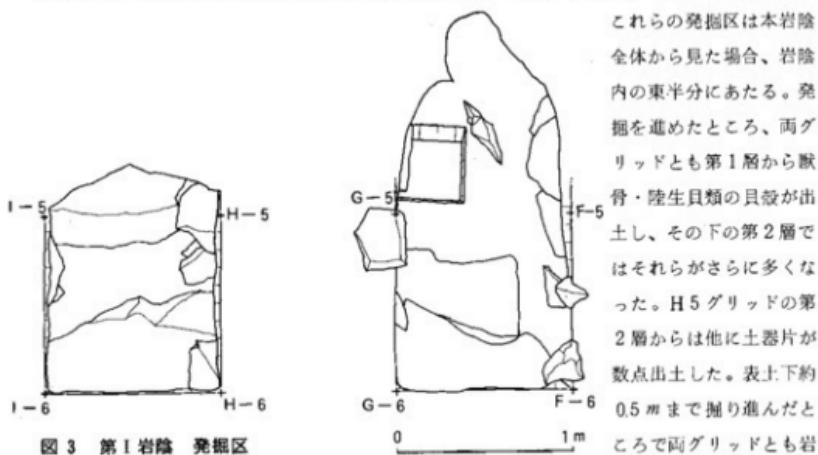
2. 第 I 岩陰

1) 発掘前の状況

第I岩陰は、現在幅約6.5m、高さ約7.2m、奥行約4.5m、ほぼ中央部の奥壁においては約45度の傾斜で発掘した限りにおいて岩陰はさらに地下に伸びている。この岩陰は一連の岩陰群のうち最も東に位置していて、第II岩陰とは落盤により分断されているが、もとは両者は連結していた。東側は岩が切りたった状態で続いている。本岩陰の底直下および前面は落盤による岩と土砂の堆積で半ばふさがれており、最も奥まった部分に幅約2mで岩壁にそってわずかな地面がのぞいていた。ここにも多数の岩石が落ち込んでいて、落葉とともにその地表をおおい、獸骨・陸生貝類の貝殻が散乱していた。

2) 発掘の経過

岩壁にはほぼ平行して、地面がわずかにのぞいた部分に1m四方の発掘区を3つ設け、東からF5・G5・H5グリッドとした。そのうち東西の2区(F5・H5グリッド)を発掘した。



壁の方向へ発掘部分を拡張し、そこをF4・H4グリッドとした。拡張部分からも同様の遺物が出土した。土器片は殆んどがH4・H5グリッドから出土し、他にはF4グリッドの第2層から1点出土したのみである。第2層を掘りぬき、その下を第3層としさらに掘り進んだがしばらくの間ごく少數の獸骨・陸生貝類の貝殻以外は何も出土しない状況が続いた。H4・H5グリッドの地表下約1.5mからカワシンジュガイが出土し、獸骨等の出土も多くなり、これらが出土する層を第4層として第3層から分離した。F4グリッドの地表下約0.9mからもカワシンジュガイが出土したが、F4・F5グリッドでは第3層と第4層の境界に明確な線を引くことができなかった。西側の発掘区(H4・H5グリッド)は表土下約1.7mで落盤の堆積が発掘区のほとんどを占めるようになり、それ以上の発掘は不可能となった。また、東側の発掘区

(F 4・F 5グリッド)は、時間の関係上地表下約1.2m(一部1.5m)で発掘を中止した。このため、第4層の下限を明らかにすることはできなかった。

3) 層位

層位は、はじめ明確に把握することが難しかったが、2枚の遺物包含層とともに、次の4層に分けることにした。層の堆積は、南から北へ、つまり岩陰の入口から岩壁の方に向かってわず

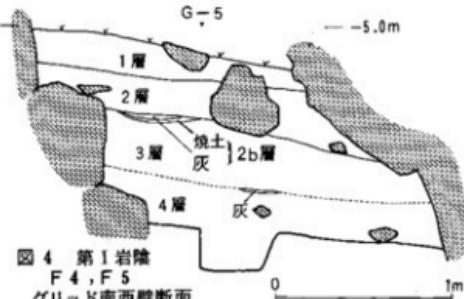


図4 第1岩陰
F 4, F 5
グリッド南西壁断面

第1層 厚さ約20cmの表土層。乾燥して軽く、灰褐色を呈する。陸生貝の貝殻・獸骨片を多く含む。H 5グリッドの岩壁近くでは石灰分を比較的多く含んでおり、これを第1a層とよぶ。なお、地表面には灰が一部認められた。

第2層 厚さ約20~30cm。きめの細かい土で、やや汚れた黄褐色を呈する。土器片7点は全てこの層から出土しており、獸骨片も他の層より多く見られ、ヒトの骨の可能性のあるものが出士した。陸生貝の貝殻も含む。F 4・F 5グリッドでは、この層に点々と炭化物が認められ、第2層最下部においては焼土及び炭・灰が検出された。これを第2b層とする。

第3層 厚さ約40~60cm。黄褐色を呈し、第2層より幾分粘質を帯びている。多くの陸生貝の貝殻と少量の獸骨片を含む。F 5・H 5の両区とも、岩壁近くでは石灰分を多く含んでいる。これを第3a層とする。F 5グリッドでは、最下部の一部に灰のごく薄い堆積が認められる。

第4層 厚さ約50~60cm以上。やや粘質で黒っぽい黄褐色を呈する。陸生貝の貝殻・獸骨片の他に、カワシンジュガイ・シジミの淡水産の貝の貝殻・木炭片を含む。

第4層の下限及びそれ以降の層位については、落石の堆積にさえぎられたため今回の発掘では明確にできなかった。しかし、H 4・H 5発掘区におけるその部分の状態を観察した結果、

かに下向傾斜し、また、東西の発掘区を比較した場合、東(F 4・F 5)よりも西(H 4・H 5)の発掘区の方が遺物包含層において厚い傾向がある。すべての層において、遺構と思われるものは検出されなかったが、各層とも大小の落石が若干混入しており、また、岩陰近くでおいては石灰分を含んでいた。

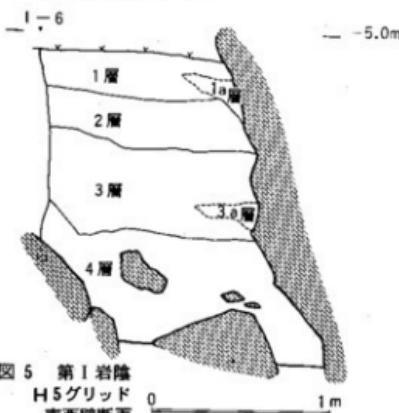


図5 第1岩陰
H 5グリッド
南西壁断面

堆積した落石間には空間があり、それ以下はかなりの量の落石が堆積しているようであった。

4) 出土遺物

1. 土器

第I岩陰の出土土器は、すべて第2層出土であり、岩壁近くでの出土が比較的多かった。ほとんどが小片で全体の器形のわかるものは皆無に等しい。以下個々の土器片の記述をおこなうが特にことわらない限り、胎土はわずかに1mm前後の砂粒を含み、焼成は普通の土器程度で、色調は暗褐色ないし茶褐色を呈する。

口縁部片は3片（図6-1・2・8、図版6-1・2・3）で、外反して端部はまるく終わっている。3片とも外面には刷毛目痕があり、内面にはヨコナデを施しているようである。図6-1の内面や2の外面には、かなりの石灰分が浸透固着しており、灰白色を呈している。

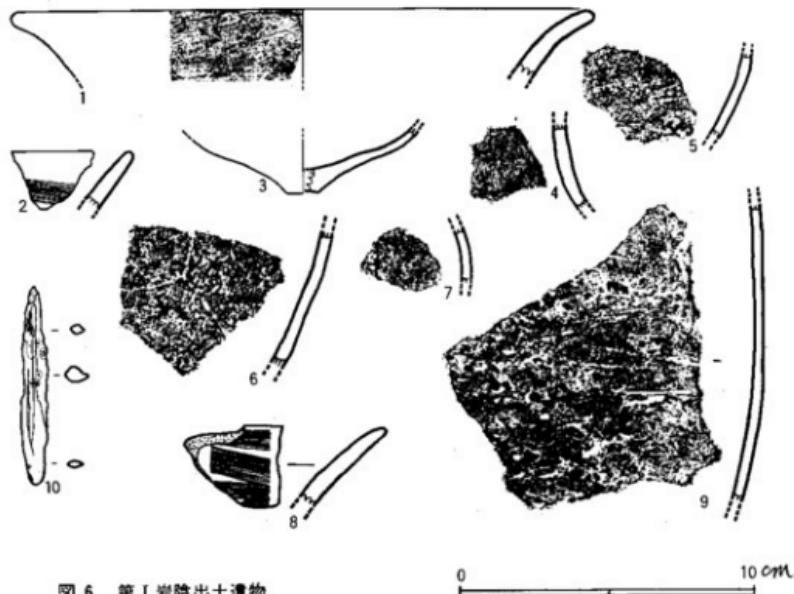


図6 第I岩陰出土遺物

図6-4（図版6-8）は壺形土器の頸部片かと思われる。胴部片は4片ある（図6-5・6・7・9、図版6-4・5・6・9）。9の外面には条痕文状の調整が明瞭に施されており、他の土器片に比べて、比較的多くの砂粒を含む。6は内面にヘラ削りを施している。外面の風化は著しいが、わずかにもとの表面を残している部分は淡赤褐色を呈する。7の外面はヘラ磨き調整で、内面は黒色である。図6-3（図版6-7）は、わずかに上げ底状になった、復原底径約1cmの底部片である。内面は黒色を呈する。

これらの土器片は小片でありまた数も少ないため時期を明確に決定しかねるが、口縁部

(図6-1-2-8)の形態、調整の具合や、7のヘラ磨き等から、土師器とみてよいであろう。あえて限定して考えるならば古式土師器(いわゆる布留式)の範囲に入るものであると思われる。そこで問題になるのは9の胸部片である。すでに述べたように胎土に他の土器片に比べて砂粒を多く含み、外面の調整痕は深鉢形縄文土器のあるものにみられる条痕文に類似しているため、一見土師器というより縄文土器と思われるものである。もしこれが縄文土器であるとするならば何らかの理由により混入したものと考えざるを得ないが、土師器にも同様の調整痕があると考えられ、第2層出土の他の土器や、明瞭に区別される第3層には明らかに縄文土器の出土がないため、一応所属不明確な土器としておく。

2. ヘラ状骨角器？(図6-10、図版7-7)

材質の種については明確にしがたく、また骨角器とも断言しにくいが、その可能性のある遺物が、H5グリッドの第2層中から出土している。長さ6.8cm、幅0.9cmの棒状のもので一端は扁平になっておりヘラ状を呈する。全体的に剥離風化が著しいがごく一部にもとの表面を残しており磨かれているとも思われる。しかし、確実に骨角器であるとはいはず、疑問符を冠しておく。

3. 貝類

○陸生貝類の貝殻：マイマイ、キセルガイは第1層から第4層まで各層に出土している。おそらく、この岩陰に棲息していたものであろう。

○淡水産貝類の貝殻：第4層から、数点のカワシンジュガイと1点のシジミの貝殻が出土している。この岩陰の立地から考えて明らかに人によって運ばれたものである。それは人の食用、あるいは他の何らかに使用されたものであろう。

4. 獣骨

第1層 イノシシ・シカ・ウサギ・タヌキ・鳥類(カラス・キジ・マガモ・ワシ・タカ類)など多数出土している。

第2層 イノシシ・シカ・カエル・齧歯類(ムササビ?)など多数の獣骨の他、ヒト(幼?)の趾骨が1片出土している。

第3層 タヌキ・ネズミ・カエル・鳥類(ツグミ)・カニ等、少数ではあるが出土している。

第4層 ウサギ・シカ・テン・ネズミ類・カエル・カメ類・齧歯類(ムササビ?)等、比較的多く出土している。

以上のように、種名の判っているものでは哺乳類が一番多く、鳥類がそれに続いている。また、第1層出土のものは新しい感じのものであり、各層出土の獣骨は、岩陰に棲息していたもの、あるいは、他の動物によって運び込まれたものであると思われる。シカ・イノシシは第3層からは出土しておらず、第2層出土のものには一部火を受けたと認められるものもあり、食用にされた可能性が高い。

5) 小 結

土器片等の人工遺物及び明らかに人間によって運ばれて来たと考え得る淡水産貝類の貝殻の出土があったのは、第2層と第4層であった。出土遺物の項で述べたように、第2層は古式土師器が製作使用された時期、つまり古墳時代前期の堆積層と考えられる。普通、遺跡の生活層でみられるような黒色がかった腐蝕土層は認められず、定住していた蓋然性は少ないと考えられるが、第2層最下部において焼土・灰が検出できること、火を受けたものを含む獸骨片と、少數ではあるが土器片が出土していることから考えて、1回限りの岩陰への来訪といったものではなく、少數の人々が、時にふれやって来て、火や土器を用い、獸を食したものと思われる。

第4層中のカワシンジュガイ・シジミの貝殻だけでは、時期は当然きめられない。ただ第2層との間に第3層（厚さ40～60cm）が堆積していることから、第2層の土師器の時期よりさかのぼることは明らかである。本岩陰群のすぐ近くから、戦後まもなく縄文土器が偶然に出土していることなどから、第4層は縄文時代に形成された可能性がある。

3. 第Ⅱ岩陰

1) 発掘前の状況

第Ⅱ岩陰は、一連の岩陰群のうち中央に位置しており、東側の第Ⅰ岩陰とはかつてつながって一つのものであった。現在の広さは、奥行約21m、幅約3.5mである。本岩陰の前面は、東西両側からの多大な流土の堆積があり、また上方の岩も全体が落石していることから、その空間は非常に狭いものであった。奥まった部分には獸骨・糞石などが散在していた。

2) 発掘の経過

第Ⅱ岩陰は、流土が岩陰入口を塞いでおり、作業空間が狭く支障をきたすため、先づこの流土を一部取り除く作業を行なった。その後、本岩陰の発掘可能部の最も東寄りにE5・E6、

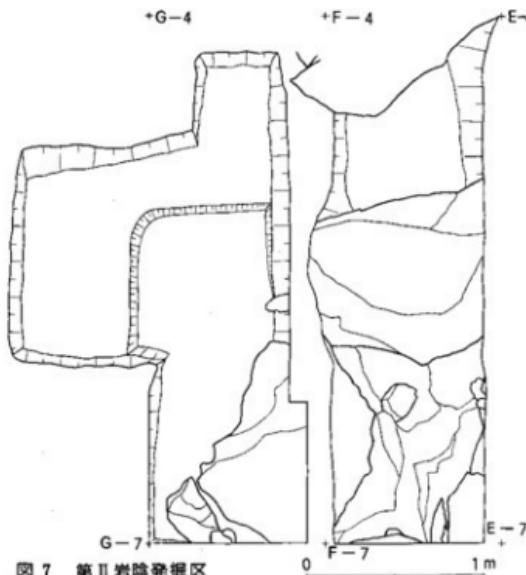


図7 第Ⅱ岩陰発掘区

及びF6の各1m四方のグリッドを設定し、発掘を開始した。これは、本岩陰は第Ⅰ岩陰と本来同一のものである可能性が大きく、あるとすれば、本岩陰はその西端に当たり、より東側を発掘する方が有効であると判断したからである。E5・E6グリッドでは、無遺物流土層を掘り下げるときもなく落盤による岩が発掘区全面に現われた。この岩の下に遺物包含層が存在する可能性は十分にあるが、岩の除去には大がかりな作業が必要なため、これ以上の発掘を断念した。このため、新たにE4・F4・F5・G5グリットを

設定し発掘区を拡張した。E4・F4・F5グリットでは、表土層より獸骨・糞石の出土を見たが、その後、各発掘区とも無遺物層がしばらく続いた。E4グリッド第4層に至って、炭及び土器細片が出土したのに続いて、F5・F6グリッドでも、獸骨・亀山焼土器片の出土を見た。ここで時間等の都合から、遅れていたF4・G5グリッドの発掘を表土下30cmで中止し、F5・F6グリッドの遺物包含層を面的にとらえる事、及びE4グリッドをさらに掘り進め新たな包含層を確認する事に全力を注いだ。その結果、F5・F6グリッドでは、獸骨・亀山焼土器片・鉄器・炭の共存関係をほぼ確認し、さらにこの層を掘りぬき第9層に至った。また、E4グリッドでは、表土下1.5mまで掘り進んだが、若干の炭以外、明確な遺物包含層を確認する事はできなかった。

3) 層 位

層は、E 4～E 6 グリット北東壁(図8)およびF 4～F 6 グリット北東壁(図9)を中心に観察した。発掘

区内には落盤による巨石が横たわるため、必ずしも各グリットで層は同様に堆積していない。各層は岩陰前面(南)から岩陰(北)に向かってゆるく傾斜しており、岩陰入口の方が厚く堆積している。

第1層 厚さ5～10cmの表土層である。よく乾燥し粒子は細い。マイマイ。

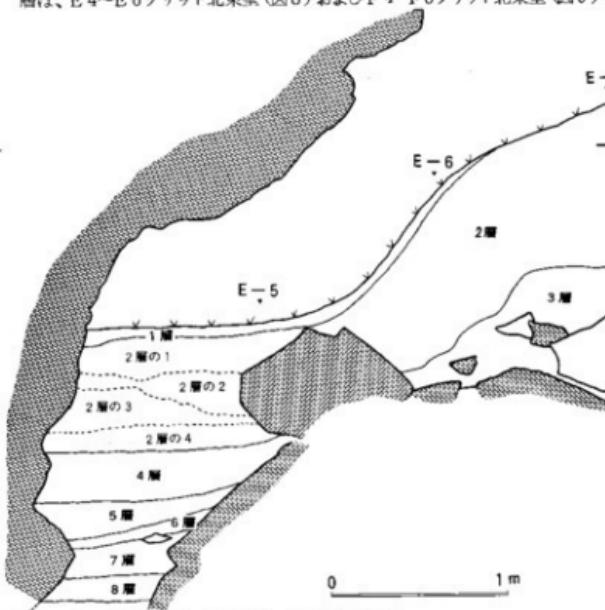


図8 第II岩陰 E 4～E 6 グリット北東壁断面

キセルガイ等の貝殻を含む。

E 5・F 5 グリットでは数点の獣骨が出土した。

第2層 茶褐色の粘土層である。発掘以前はこの層が岩陰前面をかなりふさいでいた。炭等は含まれず無遺物層である。少し赤みが

かった個所があるなど若干

のむらがある。この状態はE 4 グリットでは比較的よく観察できた。その状態は次の様である。

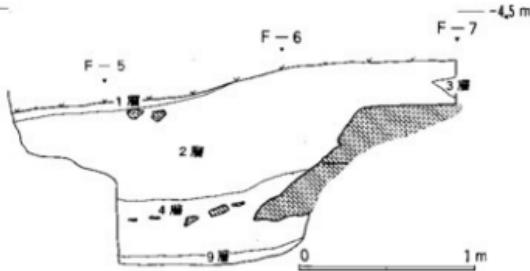
第2層の1 赤褐色で湿っており、かたい。

第2層の2 褐色で乾燥してもらい。

第2層の3 褐色で湿っており、かたい。

第2層の4 褐色で乾燥してもらい。

第3層 黒褐色の粘土層であり、無遺物層である。E 6・F 6 グリットのみに見られる。落



盤による岩石の上に乗っており、これらの岩石との間に空間を有する個所もあり、落盤直後の堆積層であると考えられる。

第4層 厚さ30~40cmの小礫を含む暗褐色土層であり、やわらかい。かなりの炭・遺物を含む。小礫はこの層上部において著しい。

F5・F6グリットでは層上部で角礫上面に接して若干の獸骨が出土したが、この層上部では炭はほとんど含まない。それに対して、層中部では多量に炭を含み、F5グリット北側では特に厚さ1cmほどの炭層を形成するが、層上部と中部の境界は明確でない。この炭層中及びその上下10cm程の間に多量の獸骨、数点の龜山焼の破片、鉄釘2本、鉄金具1点の出土をみた。獸骨はF5・F6グリットで多量に発見された。詳細は〈獸骨〉の項を参照されたい。龜山焼はF5グリットにおいて全て外面を上方に向かって接合可能なものがそれぞれ數cm程離れて出土した。鉄釘はF5・F6グリットで各1本、鉄金具はF5グリットで1点出土した。鉄製品は岩陰前面付近で比較的かたまって出土した。なお、このことと対照的に、炭・獸骨・土器の分布はF5グリット、その内でも北側ほど著しく、発掘区内、さらに岩陰奥（北）へ広がっているものと思われる。

E4グリットではF5・F6グリットより含まれる炭の量は少なく、小土器片1点が出土した他は獸骨その他の遺物は検出されなかった。

第5層 第5層から第8層は最も深く掘ったE4グリットでのみ検出された。色調等比較的第4層に似ておりほぼ同じレベルのF5第9層との関係は現在のところ不明である。第5層は暗褐色の粘土層であり、かたい。

第6層 暗褐色土層。やわらかい。若干の炭を含む。

第7層 暗褐色の粘土層であり、かたい。炭等は含まない。

第8層 乾燥した暗褐色土層。炭は含まない。

第9層 黄褐色の粘土層で非常にかたい。F5グリットにおいて第4層の下に検出されたが、E4・E5グリットではその西壁においても全くみとめられなかった。炭等は含まれず無遺物層である。

4) 出 土 遺 物

1. 土 器

第2岩陰からは、5個の土器片が出土している。

図10の1~4(図版6-11~14)はF5グリット第4層から検出された。薄手で、おそらく甕形土器の同一個体に属するものと考えられる。いわゆる龜山焼とされている中世の須恵系瓦質土器である。表面には、格子目の叩きが施され、胎土は石英微砂を含み、焼成は良好である。

2. 鉄 器

種類と特徴

鉄器は3点で、うちわけは鉄釘2点、しめ金具1点である。いずれも鍛造である。

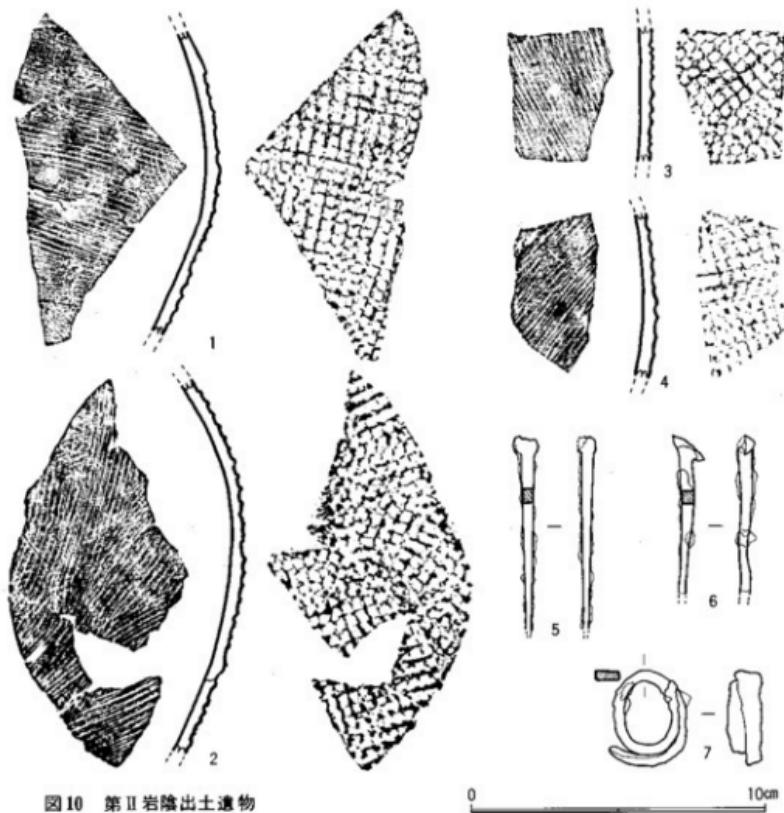


図10 第II岩陰出土遺物

0

10cm

○鉄 銚 (図10-5, 図版6-16)

銚頭は角頭で、頭部巾 0.8 cm、同厚 0.5 cm、断面はやや截頭方形である。残存部長 6.6 cm
推定全長 7 cm弱と考えられる。

○鉄 銚 (図10-6, 図版6-15)

銚頭は逆三角形の扁平で、頭部巾 1.2 cm、頭部最大厚 0.3 cm、断面はやや截頭方形である。
残存部長 5.6 cm、推定全長 6 cm程と考えられる。

○しめ金具 (図10-7, 図版6-17)

長径 3.3 cm、短径 2.7 cmの椭円形で、断面は長方形である。(最大部 0.7 × 0.3 cm) 13 cm程
の鉄の帯を反時計回りに一回転半ほど回して木柄をしめたと考えられ、木柄は金具の内
径から長径 2.1 cm、短径 1.6 cm程のものを推定できる。

3. 獣 骨

第1層……イヌ、齧歯類（ウサギ？）、鳥類、イノシシ、タヌキなど多数出土している。

第2・3層……獣骨の出土はみない。

第4層……イヌ、齧歯類（ウサギ？、ムササビ？）鳥類（ワシまたはタカ？、カラス？）イノシシなど多数の獣骨の他、ヒトの骨（？）が出土している。

以上のように、第2岩陰出土の獣骨は哺乳類と鳥類である。岩陰に生棲していたものか、他の動物によって運び込まれたものであるかはわからないが、第4層出土の獣骨が炭層中の土器と共に存関係にあったと想定されることは、獣骨に直接火を受けたものがないとはいえる、人間の食用となった可能性も出てくる。また、第2・3層から獣骨の出土をみないことは、動物の生棲、人間の居住期間の空白を示しているのであろう。

5) 小 結

上述のように、第2岩陰における遺物は土器・鉄器・獣骨・炭が中心である。この中でまず土器・獣骨・炭の3者の出土状況は次のようになる。

○出土状況は3者とも岩陰の奥に行くほどその量を増す傾向を示す。

○出土地点がF5グリッドに集中している。

○出土レベルは大差はない。

○獣骨は上部においても出土しているが、その大部分は炭層中にあり、土器も炭層中に顕著にみられる。つまり、炭層を中心にした分布が考えられる。

以上のような諸点から、3者は原位置から大きな移動は認められず、密接な関連を持つことが十分考えられ、共存関係にあったと想定される。その期間については、土器等の出土量の少なさから定住と考えるよりは、一時的あるいは季節的なものと考える方が妥当であろう。そして、獣骨は炭層中に集中している点やその種類が非常に豊富な点から、単に自然にこの場所に入り込んだというよりも、人為的に運ばれた可能性が強く、食用と考えられる。

鉄器については、他の遺物に比べ位置的にやや離れているが、他の遺物と共に存関係にあったと考えたい。鉄釘はその寸法の点や出土位置が土器などよりも前面にある点から、岩陰下の簡単な小屋がけのようなものに使用されたと推定できる。またしめ金具は山仕事の際に必要としたカマやナタのような物に使用されたのであろう。

以上のような時期（少なくとも土器から鎌倉時代の頃だと考えられる）を最後に、その後の落石によって当岩陰はその空間が狭まり、多大な流土によって埋まり、今日に至ったものと思われる。

4. 第Ⅲ岩陰

1) 発掘前の状況

第Ⅲ岩陰は南東に谷を望む急峻な斜面に位置し、他の岩陰に比べると岩陰前面のテラスがやや広い。しかし岩陰の奥行きは、最も深い地点で約3m、幅は約10m、従ってその面積は狭く約18~20m²である。

岩陰地表面には人頭大の落石が散乱しており、現地表下の落石・盤根が予想された。現地表面は第Ⅰ岩陰に比べると約2m低く、発掘区域の裂隙から流出した土砂が堆積していた。この岩陰には最近まで風神の祠があり、台石と思われる石も存在した。

2) 発掘の経過

グリッドは1m四方の発掘区を設定し、北から南にC~I、西から東に5~7と呼んだ(図11)。

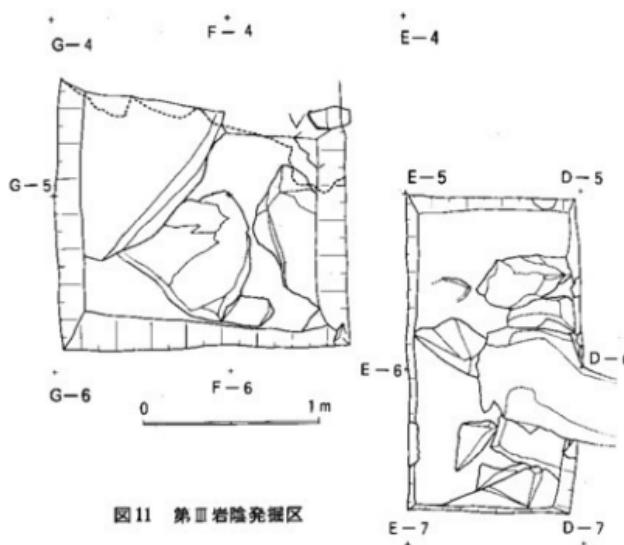


図11 第Ⅲ岩陰発掘区

まずD5・D6グリッドを掘り始め、次に併行してF5・E5を発掘した。

D5・D6グリッドにおいては、第2層から寛永通宝5枚と赤褐色土器片が数個出土した。D5・D6グリッドは途中から大形の落石が多くあらわれてきましため掘り下げが困難になつた。しかしながらD5・D6グリッドは落石の間を掘り下

げたが、遺物・遺構は見当らなかつた。そこでD5の端部分のみを残して深さ約1mで発掘を中止した。

E5・F5グリッドは、約1m掘り進んだが遺物・遺構を検出し得なかつたので、一応そのままにして岩陰側に拡張し、壁面に接するE4・F4グリッドを新たに掘り始めた。

E4・E5・F4・F5グリッドは深さ約1.1mの後述する第10層から土器片が20数片出土した。第10層は木炭片と小さな土器片等を含む黒色の層である。そこには焼土と思われる部分も見うけられた。

E4・E5・F4・F5グリッドは地表下約1.5mまで掘り下げたが、そこで落石の堆積が

著しく、掘り下げが困難となった。E 4・E 5 の掘り下げにより岩陰の壁面が思ったより西、つまり内側に入り込み、岩陰のそのレベルでの実際の面積は地表とほぼ同じことが確認された。

第10層から土器片（甕口縁部）、第12層から弥生土器（鉢の口縁部の大形破片）が出土した。

3) 層位

第III岩陰においては、岩陰に直交する形でD 5・D 6グリッドの南西壁（図12）、E 4・E 5グリッドの北東壁（図13）で断面図をとった。つまり前者の西から1mと後者の東から1m

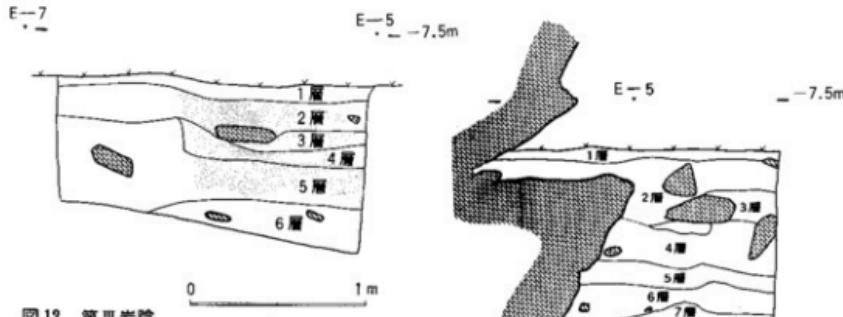


図12 第III岩陰
D 5 + D 6グリッド南西壁断面

は幅0.35mの土手をさしはさんで対応している。しかし土砂の堆積は複雑であり、土手をはさんでいる部分において若干異なる層序を示した。

E 4・E 5グリッドでは14層を確認している。またD 5・D 6グリッドでは6層まで確認したにとどまった。

以下層序ならびに層中の遺物・遺構について述べる。

第1層 表土で汚れた褐色の層であり、灰を含む。

第2層 石炭岩を含む暗褐色の厚い層であり、岩および赤褐色の土器の細片を含む。この層の上部（深さ約15cm）から寛永通宝5枚が出土しているが、それは面として捉えることはできなかった。

第3層 D 5・D 6グリッド南壁にしか見られなかった層である。第2層に類似するがやや色が薄く、石灰岩を含む褐色土層で木炭片を含んでいる。この第3層はE 4・E 5グリッドの断面においては検出されていない。

第4層 あまり石灰岩を含まない黄褐色土層であり、第2層と同じく土器の細片を含む。

第5層 第2層よりやや明るい暗褐色土層であり厚い層をなしている。この層も石灰分を多く含み木炭片が入る。

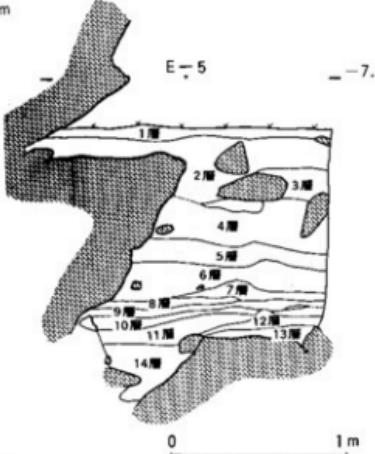


図13 第III岩陰
E 4・E 5グリッド北東壁断面

- 第6層 褐色土層で、木炭片・焼土の小塊を含む。
- 第7層 石灰分を含むやや薄い暗褐色土層で、木炭片を少量含む。
- 第8層 石灰分をあまり含まない明褐色土層である。
- 第9層 汚れた褐色土層で、土器細片・木炭細片を含む。
- 第10層 黒色土層で 灰や木炭片を含み、上面からははりついたような状態で土師器片が出土している。また土師器片の出土した部分よりやや下方で、径30cm程度の焼土面が認められた。
- 第11層 やや明るい褐色の層で、木炭片をわずかに含む。
- 第12層 黒褐色土層であり、木炭片・灰を含む。この層の上面の岩陰に接した部分で弥生土器の鉢の大形破片が出土している。
- 第13層 赤っぽい褐色土層で遺物は含まない。この層は一部隆起しており、10層・11層の平面的な形成を中断させている。
- 第14層 やや汚れた感じの黄褐色土層であるが、落石の上に部分的に堆積したものと思われる。岩の堆積が著しく、それ以上の掘下げが行えなかった。

4) 出土遺物

1. 古銭

D5・D6 グリッドにおいて、第2層上部から出土した寛永通宝は青銅製のもの4枚(図14-1~4)と鉄寛永と呼ばれる鉄製の寛永通宝が1枚である。前者は狭い周縁(輪)

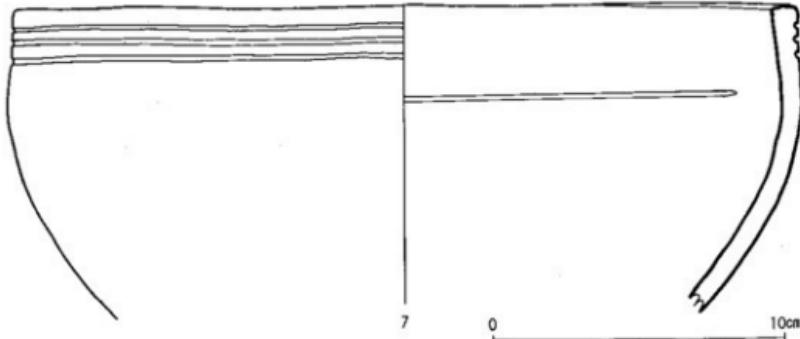


図14 第Ⅲ岩陰出土遺物(寛永通宝1~4、弥生土器ないし土師器5・6、弥生土器7)

を持ち、古寛永と言われるもので、裏面は無文である。保存は極めて良く、緑青が少なく部分的に光沢を保っているものもある。後者の鉄寛永は誘によって青銅製の寛永通宝に付着しているものである。これは拓本には示せなかったが、表はかなりの誘が付着しており、狭い周縁と「永」・「通」の文字が認められる。

2 土 器

E 4・E 5・F 4・F 5 グリッドからは約20片の土器が出土している。これらは二重口縁を持つ壺の破片である。小破片がほとんどであり、胎土・色調にも目立った差がなく正確な個体数は不明であるが、2片の異なった口縁部片からすれば、少なくとも2個体は存在していたと考えられる。

破片には石灰分の付着が著しい。胎土には細かい砂粒を含み、赤褐色を呈している。胴部内面にはヘラ削りが施され、外面はナデにより平滑に仕上げられている。口縁部はほぼ垂直に立ちあがる二重口縁を呈し、内外面ともナデが施され、口縁帯上半には櫛描沈線が施されている。沈線の数は、図14-5（図版6-18）においては5本、図14-6（図版6-19）では5本以上である。

これらはその特徴から弥生時代終末期の土器ないし古式の土師器と思われる。

次にE 4 グリッド第12層からは 比較的大形の鉢の破片が出土している（図14-7・図版7-1）。器表には石灰が厚く付着している。胎土には5mm以下の石英・長石粒をかなり含み、褐色を呈している。

器形は口縁がやや内湾する深い鉢形を呈しているが、脚の有無は不明であり、ここでは鉢形土器と呼んでおく。口縁部はやや肥厚しており、上面は平坦にナデが施されている。外面下半にはヘラ磨き（？）が施され、上半はナデ、さらに、3本の退化した凹線が施されている。内面には上半にナデが施され、下半は指頭による押圧の後ナデが施されている。また内面にも一部に、やや不規則な凹線が認められる。

一片のみで時期の判断は困難であるが、この土器は、口縁端部の拡張が退化しており、また凹線も粗雑化を示し、弥生時代後期前半のものと思われる。

5) 小 結

本岩陰の状況は前述のとおりであるが、それが遺跡の全容ではないにしても、その構造のおよそを示すものと考えられる。

前面に少し広いテラスを持つ岩陰のほぼ中央部には、風神の祠があった地表面の台石等の痕跡を除けば、第2層・第10層・第12層という遺物包含層が確認された。このうち第2層は寛永通宝に示されるように近世以降の堆積であり、最近まで存在した祠に関連したものと思われる。又、第10層・第12層はそれぞれ弥生時代終末期ないし古墳時代初頭・弥生時代の層と見られる。それらは一時的にしろ、何らかの機能を果した生活層と考えられる。しかし、第3～6層に見られる土器細片、あるいは木炭片は固定した生活面等とは考えられない。岩陰として

は思ったより雨をしのぐ面積が狭く、壁面も内に入り込まない事が判明した。

以上のことから本岩陰は、弥生ならびに古墳時代の何らかの狩猟・採集の際にくり返し行なわれた一時的生活址程度の機能をもったものと考えられる。

5. 動物遺体一覧

第Ⅰ 岩陰出土動物遺体

貝類を除く動物遺体

○第1層		(種類など)	(部位)	(出土区)
シ	カ (ニホンカモシカ?)		右上顎骨 (P ₂ ~ M ₂ 残)	H 5
イノシシ			左上腕骨の遠位端	H 5
			端節骨	H 5
			趾骨	H 5
			末節骨	F 4
イヌ			肋骨	F 4
ウサギ			左右脛骨	F 4
			左大たい骨	F 4
ホ乳類?			右肩甲骨	H 4
カラス?			胫骨	H 4
ワシ・タカ類			趾骨	F 4
マガモ?			右胫骨	
キジ			右上腕骨	H 5
鳥類			上腕骨	H 4
			右中足骨(蹠)	H 5
			左肩甲骨	H 5
			胫骨	H 5
			左大たい骨	F 4
			せきづい骨	F 4
○第2層				
ヒト			趾骨	F 4
シカ			趾骨	H 5
			右上腕骨(幼)	H 5
			肩甲骨(左・幼)	H 5
			肋骨	H 5
イノシシ			左上腕骨(幼)	H 5
			左上腕骨(幼)	H 5
			右下顎骨(蹠)	F 4

タヌキ?	右大たい骨	
	右 脊 骨	
	左 上 腕 骨	
◊歯類 (ムササビ?)	せきづい骨	H 5
	門 齒	H 5
	肩 甲 骨	H 5
	趾 骨	H 5
鳥類 (ツグミ?)	仙 骨	
	尺 骨	F 4
	趾 骨	F 4
カエル	左 上 腕 骨	H 5

○第1層か第2層か不明なもの

シカ	趾 骨	F 5
鳥類	?	F 5

○第3層

ネズミ類	左大たい骨	F 4・5
	仙 骨	F 4・5
	門 齒	F 4・5
カエル	大 た い 骨	F 4・5
カニ類 (サワガニ?)		

○第4層

シカ	趾 骨	H 4・5
テン	左下顎骨 (P ₂ 残植)	H 4・5
ネズミ類	第1脛骨	H 4・5
	左上腕骨	H 4・5
	右大たい骨	H 4・5
	門 齒	H 4・5
◊歯類 (ムササビ?)	中手 (足?) 骨	H 4・5
	せきづい骨	H 4・5
ウサギ	趾 骨	H 4・5
カエル	?	H 4・5
カメ類	?	H 4・5

○層位不明

鳥類	上腕骨	H 4・5
	中足骨	H 4・5
	右鳥口骨	H 4・5

○H 4・5グリッド西側の落石下(表土下約25cm) — 78年2月2日 西森採集

シカ	趾骨
タヌキ	右肩甲骨
	左尺骨
サギ(小形?)	肩甲骨
	左けい骨
	右仙骨
鳥類	腰骨
コウモリ類?	左大たい骨

貝類

○第1層

マイマイ	H 4・5	F 4・5
キセルガイ	H 4・5	F 4・5

○第2層

マイマイ	H 4・5	F 4・5
キセルガイ	H 4・5	F 4・5

○第3層

マイマイ	H 4・5	F 4・5
キセルガイ	H 4・5	F 4・5

○第4層

マイマイ	H 4・5	F 4・5
キセルガイ	H 4・5	F 4・5
カワシンジュガイ	H 4・5	F 4
シジミ	H 5	

第Ⅱ岩陰出土動物遺体

貝類を除く動物遺体

○第1層

イノシシ	胫骨遠位端	F 4
イヌ	胫椎骨	E 4
	尾椎骨	E 4
	胫椎骨	F 4
タヌキ	右下顎骨	F 4
齧歯類 (ウサギ?)	大たい骨 (左右)	E 4
齧歯類	中足骨	E 5
鳥類	?	E 4
	?	F 4

○第4層

ヒト?	?	F 5
イノシシ	上腕骨	F 5
	右下頸枝端骨	F 5
イヌ	右下顎骨	F 5
ウサギ?	仙骨	F 5
ムササビ?	右上顎骨	F 5
齧歯類	左肩甲骨	F 5
カラス	左上腕骨	F 5
ワシ・タカ類	趾節	F 5
鳥類	上腕骨 (左右)	F 5
	中手骨	F 5
	鳥口骨	F 5

貝類

○第1層	マイマイ	E 4・5	F 4・5
	キセルガイ	E 4・5	F 4・5
○第4層 (E 4・5)			
	マイマイ	E 4	
○第4層 (F 4・5)			
	マイマイ	E 4・5	

6. あとがき

本調査は、戦後まもない頃に出土した1個の縄文土器に導かれ、その付近でたまたま発見された岩陰遺跡の試掘であり、確たる自信はなかったものの、縄文時代の遺跡を期待して実施された。ごく限られた日程に加え、大小の落盤に遮られて、所期の目標には及ばなかったが、少數とはいさざまな時代に亘る遺物を見出し、この岩陰を利用した人々の暮らしの片鱗を垣間みることができた。各班報告の小結と重複することになるかもしれないが、以下かいつまんで述べて結びとしたい。

縄文時代に関しては、第Ⅰ岩陰第2層において出土した晩期縄文土器の可能性をもつ1片と、その下方に形成された層とくに第4層が問題となる。そのうち土器については、第Ⅰ班の報告で、明確な特徴をとらええない点と古式の土師器（または弥生時代末と考えられる土器）と同じ層位で発見された点とが考慮されて慎重にその断定を避けているのは妥当と思われる。第4層については、その直上の第3層が陸生貝類を含めて人の営みをみない自然堆積である可能性が高いにもかかわらず、第4層には木炭片とともに人が運んだと考えられるシジミとカワシンジュガイがみられた。したがって、この層は人の営みとともに堆積した層であると考えてよいであろう。不幸にして人工になる遺物が発見されなかつたので、その所属時期をきめることはできないが、これが古墳時代初頭より遡る層であることはほぼ確かであろう。将来この岩陰利用の上限をつきとめようすれば、この第4層以下が最有力候補地となろう。

弥生時代に関しては、第Ⅲ岩陰からやや大形の鉢形土器が出土し、また弥生時代ないし古墳時代初頭に所属すると考えられる土器片数片が、第Ⅰ及び第Ⅲ岩陰から発見されている。第Ⅲ岩陰では獸骨などを伴わなかったが、第Ⅰ岩陰では若干の動物遺体が炭や焼土・灰とともに出土している。さらに龜山焼とよばれる中世の土器が第Ⅱ岩陰から本遺跡としては比較的多量の獸骨・炭層を伴って出土したが、1個体分に属する数片であった。

このように、縄文時代についての不確定さを除き、以上の各時期とも本岩陰の利用は一時的で、ごく少人数によるものであったと考えられる。しかし、炭や骨類ないし両者をふくむ層が第Ⅰ・第Ⅱ岩陰において20~40cm前後、第Ⅲ岩陰において10cmないしそれ以上の厚さを示しているので、一時的利用とはいえ、それは反覆してなされたものと思われる。とすれば、狩猟をふくめた山仕事に際しての寄り場（仮り小舎）ないし避難所として利用されたと考えることがもっとも有力となろう。

動物遺体はひじょうに多種多様で哺乳類9種以上、鳥類6種以上、両棲類2種、その他貝類がみられる。何れも部分骨であり、一個体を残すものはない。中には破碎されたもの、焦げたものもあり、少くともその一部が人により食料とされたことは疑いない。

なお本調査の直後、兼高昭一・西森裕良両氏の努力により、川上町高山市字ナル川内道上において、上層から後期縄文土器を出土する保存良好な岩陰遺跡が発見され、近く試掘が予定さ

れていることを付記する。今回の発掘調査の日々を楽しく有意義に過すことができたことは、
三上教育長はじめとする川上町教育委員会及び同公民館の職員の方々、兼高昭一氏ご家族の
好意の賜物であることを最後に明記して、心から感謝したい。

付

本調査のきっかけとなった縄文土器は、第15図にみるよう、腰のすわった壺形の肩部に注口を付し、その反対側にジョッキ状把手をつけた形のものである。注口と口縁部下方との間にも環状のブリッヂをわたしている。

注口部と口縁端の一部が破損し、肩部から胴部にかけての表面の一部が剥脱していることを除いて、ほぼ完形である。注口は約45度の上向きである。把手は中央をくぼめ両側に隆起をもたせ、体部との結合部を肥厚させた頑丈な作りである。注口直下に1、把手直下に2、把手上面に2の押圧によるほぼ円形の凹みがみられるほか、無文である。

最高12.8センチ、胴最大径14.5センチ、口径約7センチ、注口内径は現存部で1.5～2.5センチ、器厚はもっとも厚いところで1.5センチ、薄いところで0.5センチ、平均的には0.7～0.8センチをはかる。胎土には石英・雲母など1～2ミリの細礫をふくむ。褐色を地色とするが、底部か

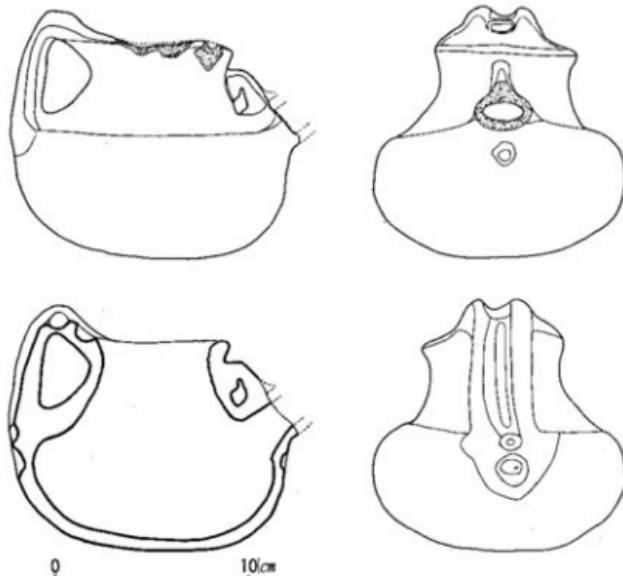


図15 縄文注口土器

ら注口のある前面にかけて部分的に暗褐色、また底面の一部には黒褐色の濃い個所が斑状にみられる。割れ口でみると器壁中心は灰黑色を呈する。底部一帯にはこまかにひびわれがいちいちる。内外とも調整良好である。外面には指頭状の痕跡をかるくとどめるが、ほぼ平滑に仕上げられている。頸部内面には横方向のへら磨きがみとめられる。以上のような特徴から、この土器は縄文時代後期に所属すると考えられる。

戰後まもない頃石灰岩採掘中に、今回発掘の原滝山岩陰遺跡下方の斜面から出土したもので、当時の石灰工場の溝原社長が長い間保管し、のち兼高昭一氏を通じて最近川上町教育委員会の所管となった。出土地点はその後の石灰岩採掘によって全く失われたが、関係者の話しを総合すると、これまた岩陰状をなしていたらしい。

中・四国地方では注口土器の出土例は津雲貝塚例を除いてごく少く、しかも本品のようなほぼ完存品は稀有といってよく、本調査報告に付録として概略を記した次第である。なお実測に当たり田仲満雄君を煩わせたことを記して厚く感謝したい。

PLATE 1

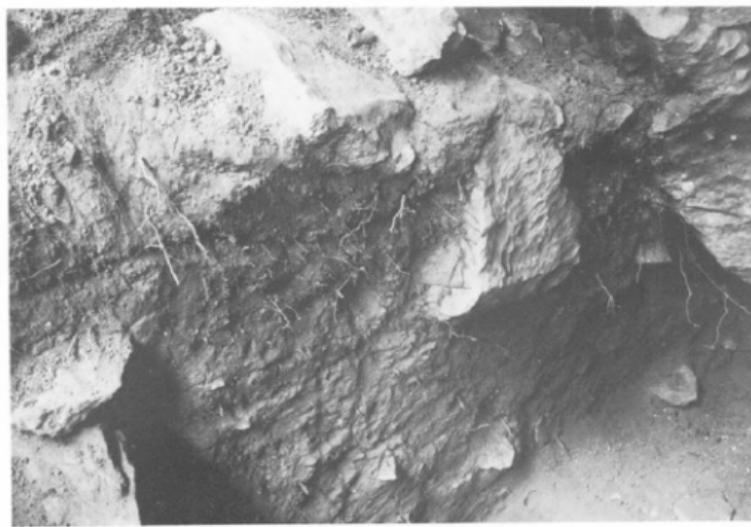
図版一 遺跡遠景



遺跡遠景 上 南西方向から 下 東方向から(黒線で遺跡の範囲を示す)

PLATE 2

図版2
第一岩陰



上 第I岩陰発掘前 下 第I岩陰F4, F5 グリッド南西壁断面

PLATE 3

図版3 第II岩陰



上 第II岩陰発掘中 下 第II岩陰F4～F6 グリッド北東壁断面

PLATE 4

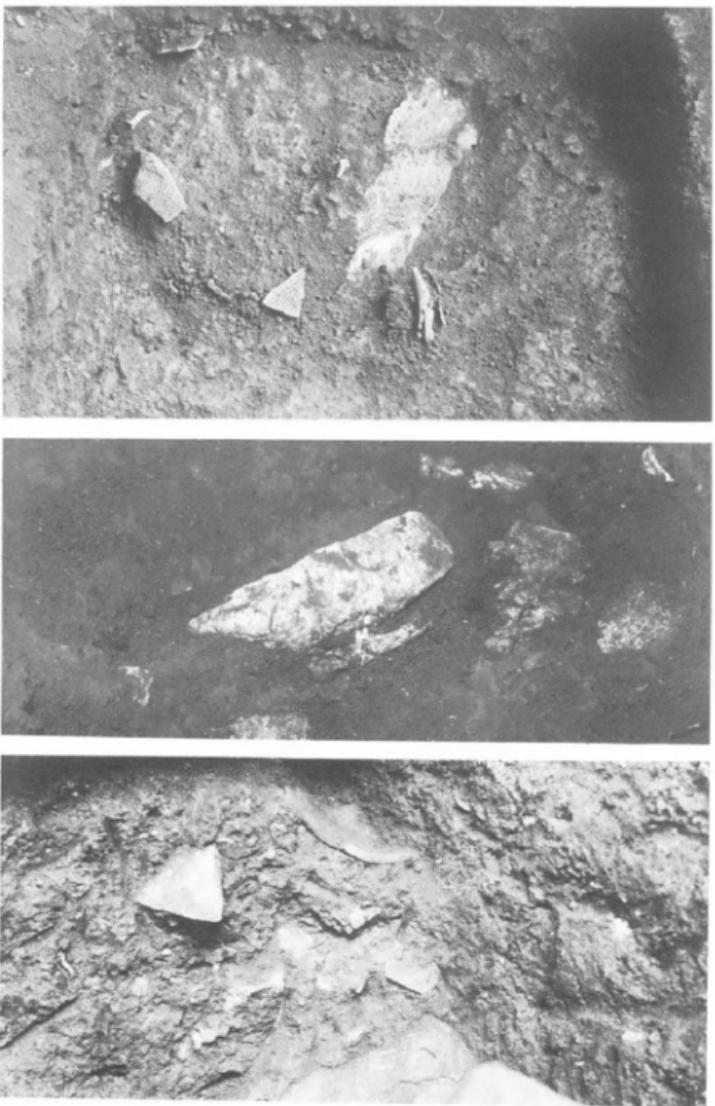
図版4
第Ⅲ岩陰



上 第Ⅲ岩陰発掘前 下 第Ⅲ岩陰 E4、E5 グリッド北東壁断面

PLATE 5

圖版 5
遺物出土狀況



上 第Ⅱ岩陰土器・獸骨出土狀態， 中 第Ⅱ岩陰獸骨出土狀態， 下 第Ⅲ岩陰土器出土狀態

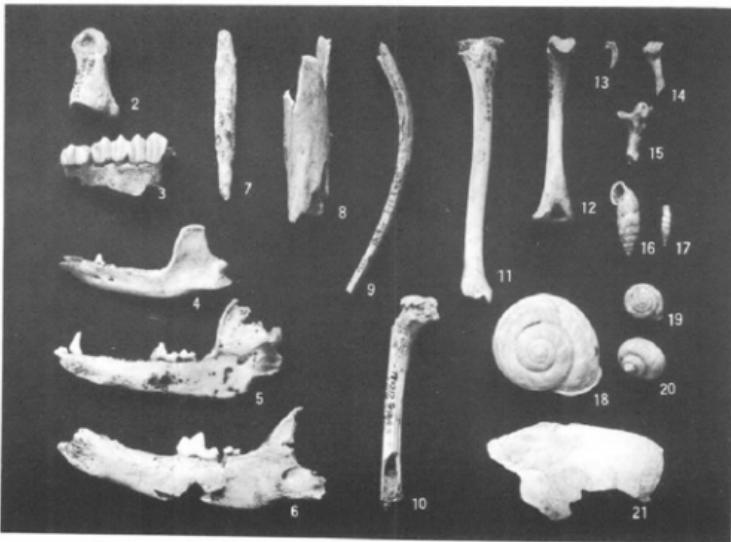
PLATE 6

圖版 6
出土遺物



1~9 第Ⅰ岩陰, 10~17 第Ⅱ岩陰, 18·19 第Ⅲ岩陰

PLATE 7



1 弥生土器(第III岩陰・E4グリッド・第12層)、2 シカ(I・H5・2)、3 シカ(I・H4・表)、
4 テン(I・H4・3)、5 タヌキ(II・F4・1)、6 イヌ(II・F5・4)、7 骨角器?(I・H5・2)、
8 イノシシ(II・F5・4)、9 シカ(I・H5・2)、10 タヌキ?(I・?・3) 11・12 タヌキ(I・?・3)
13 ワシ・タカ(I・F5・4)、14 カエル(I・H5・2)、15 薙歯類(I・H5・2)、16・17 キセルガイ
(I・H5・3)、18~20 マイマイ(I・H5・3)、21 カワシンジュガイ(I・H5・4)



繩文土器

原瀧山岩陰遺跡

1979年12月10日印刷・発行

編集代表 近藤義郎 ©

発行者 岡山県川上郡川上町教育委員会

